

天文民俗調査報告(2021年)

北尾 浩一*

概要

2020年に続いて、沖縄県、鹿児島県の調査に取り組んだ。しかしながら、コロナ禍により殆どの計画を断念せざるを得なくなり、実施できたのは、沖縄本島読谷村、糸満、久高島、そして鹿児島県南さつま市、枕崎市等であった。2021年には、2019年以降調査の南西諸島に伝わる多様で豊かな星名伝承の集大成の準備を進めた。また、群れ星がプレアデス星団を意味するかどうかについてもデータの収集を続けた。

1. はじめに

1978年、新潟県佐渡郡相川町姫津(現 佐渡市)より星名伝承の調査をはじめてから44年目になった。調査を実施した地域は、「沖縄県」「鹿児島県」である。

2. 調査の概要

2-1. 調査方法

漁業等の昔の仕事に従事した経験を持つ高齢者、経験がなくても年上から伝え聞いていた高齢者(昭和30年、40年代生まれを含む)を中心にインタビュー調査を行なった。最も高齢の伝承者は昭和2年生まれ、最も若い伝承者は昭和35年生まれであった。必要に応じて会話を減らすために写真や図を提示する等のコロナ禍における調査を実施した。また、できるだけインタビューの時間を短くするようにした。

2-2. 調査地

2021年は、次の9箇所で開催された。

- ・1月…鹿児島県南さつま市坊津町久志、枕崎市松之尾町、肝属郡肝付町内之浦漁港
- ・11月…沖縄県南城市知念久高、糸満市糸満、中頭郡読谷村都屋、宇座、沖縄市泡瀬、宜野湾市普天間

3. 各地域の星名伝承

3-1. 鹿児島県南さつま市坊津町久志

(1) 星名

宵の明星…イリノミョージョー

(2) 伝承

・イリノミョージョー、南西の空。イリノミョージョーを背中にすると(久志の港に)帰ることができる。

・前回訪問した際、クサキという北斗七星の名前を記録した。

「水を汲むもの。クサキ。昔、竹で作って。孟宗竹で作って。その形に北斗七星なって。クサキが出た。北斗七星、クサキが出た。クサキ、水を汲むひしゃく。水道なくてカメに水を汲んでカメの水をすくいあげる、カメの水をくむクサキ。それ(クサキ)を見て帰ってきた。クサキ、竹で自分で作る」

北斗七星をクサキという水を汲む柄杓に見立てたのである。前回記録した話者は亡くなられていたが、次のように伝えていた。

「柄杓(ひしゃく)のことをクシャ、クサと言う。クシャは、子どものころ見た記憶があるのが、竹をフシのところで切って、竹か木をさして持つところをつけたもの」
(話者生年:昭和35年、坊津町久志出身)

3-2. 鹿児島県枕崎市松之尾町

(1) 星名

プレアデス星団…スワリ

オリオン座三つ星…ジョウトウヘイボシ

(2) 伝承

*星の伝承研究室
starlore_kitao@yahoo.co.jp *

・スワリ、椅子みたいな恰好。小さい星かたまって。(いくつか尋ねると、「小さいから数えられるかい」という答えがえってきた。椅子に座っているからスワリではない)

・ジョウトウヘイボシ、軍隊の上等兵、星3つ。
(話者生年:昭和11年、長崎県島原出身)

3-3. 沖縄県南城市知念久高

(1) 星名

プレアデス星団…ブリブシ

北斗七星…ナナティブシ

北極星…ニヌファブシ

宵の明星…ユーバンマブヤー。ユーバンマムヤー(ユーバン:夕飯、マブヤー、マムヤー:守る)

明けの明星…ヨーカーブシ

流星…フシノヤーウティ(移動する。ナガリブシ)

(2) 伝承

- ・ニヌファブシ、北極星。ナナティブシの横にある。右側に見える。大きい星。目当てになる。方向わかる。
- ・ニヌファブシ目当て。中国との貿易、久高の人が船長多い。福建省までニヌファブシ目当て。ローソク、線香もやして、一本燃(も)た、と時間を知った。(北尾注:ニヌファブシで方角、線香をもやして時間を知り、福建省まで航海)(嵐などで遭難して)帰って来れなかった人のことを、トータビ出た。唐旅に出た、と言った。「唐の国に旅に行った」は、「死んでしまった」という意味。
- ・昔の人、イカ釣りに、くり舟で出た。ヨーカーブシでたから帰る時間。ヨーカーブシ(あるいは星)が出たときに釣れることはない。月の出ているときより暗いときのほうがよい。
- ・ブルブシ、訂正してブリブシ。ブリ、群れになっていること。ブリブシ、小さい。(空全体の星ではなく、プレアデス星団を意味すると思われる)
(話者生年:昭和2年、久高島出身)

3-4. 沖縄県糸満市糸満

(1) 星名

プレアデス星団…ブリブシ

北斗七星…ニーブブシ

北極星…ニーヌファブシ

南十字星…ウマノファ

明けの明星…ユーアキブシ

彗星…イリガンブシ

(2) 伝承

- ・ニーヌファブシ、動かない。ニヌファブシ、目当てに行った。
- ・南十字星、ウマノファ、夜中見える。

一番上の星、動かない星。下の三つの星、動く星。

・フサアギ、4月。(旧の4月)ブリブシ、4月に上がる。そのとき、風が吹く時季になると言われているさ。フサアギ、要注意。東から東風。フサアギ、星上がり。旧の4月。

・ユーアキブシ、2時間で朝。ブリブシのことを、ユアカブシと言う。(北尾注 ブリブシとユアカブシが混乱)
(話者生年:昭和6年、糸満市糸満出身)

3-5. 沖縄県那覇市首里鳥堀町

(1) 星名

・宵の明星…ユーバンマンジャー

(2) 伝承

- ・ユーバンマンジャー。マンジャー、ほしがっている。夕飯を欲しがっている。
- ・ムリブシ、(空)全体にあれこうして。(北尾注 空全体の星をムリブシ、プレアデス星団単体ではない)
- ・ナナチブシ、ニーヌファブシと同じ。七つ、柄杓の形。(北斗七星と北極星について、記憶が定かでなかった)(弁ヶ嶽(べんがだけ)にて、英祖の末裔という女性の話。話者生年を記録漏れ)

3-6. 沖縄県中頭郡読谷村都屋

(1) 星名

北極星(北斗七星)…ニーヌファブシ

(2) 伝承

- ・ニーヌファブシ、それを見当てに。北斗七星。7つね、4、3、柄杓の。(北尾注、北極星と北斗七星と混乱)
- ・ムリブシ、星がたくさんある。全体の星。(北尾注、プレアデス星団ではなく、空全体の星を意味した)
(話者生年:昭和14年、読谷村伊良皆出身)

3-7. 沖縄県中頭郡読谷村宇座

ティンモーモー、残波岬に集落があったころ、地頭をしていた与久田の先祖の屋敷に天から落ちたと伝えられている。現在は、宇座の公民館近くの与久田家の敷地内にある。(読谷村史編集委員会 1995)



4. 特筆すべき星名伝承

4-1. プレアデス星団を意味するとは限らない群れ星

プレアデス星団の南西諸島における星名は群れ星のグループであるという先行研究に疑いを持たなかった。野尻抱影氏は、日本星名辞典の「沖縄の星名」の章で、ムリカブシ(すばる)と記し、宮良當壯氏著『八

『重山古謡』の「ムリカブシ、ムリブシ、ムニブシ、シニブシ」を引用している。また、「奄美の星名」の章で、「すばるは沖縄と同じく農耕の星を代表していて、名も、『ブレブシ(群れ星)大島宇検、ボレボシ(同)沖永良部島…』である」と記している。(野尻 1973) 拙著『日本の星名事典』においても、群れ星のグループの星名はプレアデス星団として記した。(北尾 2018)

ところが、35年のブランクを経て2019年8月から沖縄県の調査を再開したところ、群れ星のグループの星名がプレアデス星団のみを意味するのではなく、「空全体の星」「プレアデス星団以外の一か所にまとまった星列」を意味する伝承事例を記録した。

2019年の場合、久高島、糸満の事例はプレアデス星団であるが、その他の地域は次のように「空全体の星」等を意味した。

・那覇市首里鳥堀町…ムリブシ、(空)全体にあれこうして。

・読谷村都屋…星がたくさんある。全体の星。

亀甲節(かみぬくぶし)の事例は注目すべきである。「天のぼれ星や皆が上ど照ゆる黄金(こがね)三つ星や我上(わうへ)ど照ゆる」(島袋、翁長 1968)

黄金三つ星は、オリオン座の三つ星を意味する。「ぼれ星」の語意について、「天の一杯にむらがっている星」、評釈に「天の群星は、一様に皆の上を照らしているが、黄金三つ星は私の上のみを照らしている」(島袋、翁長 1968)と記されている。もし「ぼれ星」(群星)が、プレアデス星団であれば皆の上を照らすことができず、本事例では明らかに群れ星が空全体の星である。

群れ星がプレアデス星団を意味するかどうかについては2022年以降もデータの収集を続けたい。

4-2. 南十字の星名

糸満にて、「南十字星、ウマノファ、夜中見える。一番上の星、動かない星。下の三つの星、動く星」と記録した。糸満漁師の行動範囲は広く、北極星の高度が低くなり南十字が見える緯度まで南下していく。話者はその体験を語るが、一番上の星が動かないというのは、北極星ニューファブシとの混乱が生じていると思われる。

南十字の星名については、確定できない要素があり、拙著『日本の星名事典』に、鳩間島の事例を「現時点で同定できていない星名」の項に記した。

・シマヌパブシ(沖縄県八重山郡竹富町鳩間島)…鳩間島からは西表島に隠れて南十字の下の星は見えない。シマヌパブシの両サイドの二つの星(北尾注 南十字 β 、 δ)が水平になるとカキノ(米刈)のバンジン(最中)と伝えられていた。(北尾 2018) しかしながら、『日本星名辞典』には、ケンタウルス α β で稲刈の時

期とした事例があり、両者の伝承の関連についてが課題となる。

また、北尾が実施したアンケート調査で記録した沖縄県平良市字松原(現 宮古島市)のウマヌパブシは南十字を意味した。(ウヤキブスについては、後述)

友利健氏は、平良市字久貝(現 宮古島市)出身の父親(大正8年生まれ)から南十字星のことを「んまぬふあぶす」と聞いた思い出を知らせてくれた。宮古島の久松地区では午の方星が南十字を意味しているケースが複数伝えられている。

与那国島においても、南十字を午の方星と呼んでいた。

明治26年生まれの祖父とシマヌファブシを見た思い出を次のように語ってくださった。(北尾 2021)

「ほとんどが上の3つしか見えないですね」

「祖納からは宇良部山に隠れて見えません。東崎あたりには見えないと見えませんよ」

(話者生年:昭和22年、与那国島祖納出身)

一方で、明らかに南十字を意味しない午の方星の事例がある。例えば、1979年3月、沖縄県八重山郡竹富町竹富島の上勢頭亨氏から、「ウマノファが隠れるように、雨だれ(庇)を下げたら台風が来ても安心」と聞いた。高度5度~6度くらいのケンタウルス座 α β 、みなみじゅうじ座 β δ よりも高度の高い星を意味した。

4-3. 南西諸島で新たに記録できた星名

2019年より再開した南西諸島の調査により2021年の時点で、次のような新たな星名を記録した。これらは、拙著『日本の星名事典』に掲載できていないものであり、2022年に記録した星名とともに補遺としてまとめたい。

●ウヤキブス…沖縄県宮古島市。南十字を意味するとは現時点で確定できない。

北尾が1984年に実施したアンケート調査で沖縄県平良市字松原(現 宮古島市)のウマヌパブスとともに、ウヤキブス(ウヤキ:金持ち、ブス(星))とも言うという回答があった。ウヤキブスについては、南十字と確定するには現時点では十分な伝承資料を記録できていない。

2019年に実施した現地調査で出会った昭和14年生まれの話者の父親(松原出身)は、ウヤキブスについて南十字と決定することに否定的な伝承を伝え聞いていた。

「おやじがウヤキブスに夜明け手をあわしていた。ウヤキブスといって夜明けに手をあわして。あやじなんかやっていた。ウマノファブスとウヤキブスはいっしょ。ひとつ光っている星がウヤキブス。朝早く」

「おやじウヤキブスおがんで。夜明け前、6月、7月。ウヤキ、かみさまに願う」

「南のひとつの星。ウヤキブス。ウマノファブスと同じだろう」

「ウマノハブス、ウヤキブス、東のかど、南ではなく。光が金持ち。金持ちになれる意味で…。ウマノファ 東の角。ウヤキブス、明けの明星」

父親の体験で直接の体験ではない。南のひとつの星か東のかどかは記憶が定かでない。語ってくれた内容からはウマノファ、ウヤキ共に4個の星で構成する南十字ではないと思われる。

●ウヤキブシ…沖縄県八重山郡竹富町黒島。織女(こと座 α)と牽牛(わし座 α)を意味する。

喜舎場永珣氏著『八重山民謡誌』のチンダラ節にウヤキ星が掲載されている。

「トウバラマトウ バントウヤ カヌシヤマトウ クリトウヤ」
(殿原(恋男)と妾とは 可愛乙女(恋女)と これとは)
「イミシヤカラ 遊ビトウラ クユサカラ ムチイリトウラ」
(幼少の時から 遊び仲間であった 子どもの頃から 連れ友達であった)(喜舎場 1967)

チンダラの意味について、喜舎場氏は、「可哀相だ、ふびんだ、同情に堪えぬ意」と記している。1732年、琉球王府の命令で黒島から石垣島野底に強制移住させられ、黒島で永遠にともに生きるはずであった二人の恋人は引き離されてしまった。野底に移住させられたのはマーペーという女性であり、その切なさを星に歌う。

「天(テイ)カラヌ ピキイミヨウル ウヤキ星(ブシ)デ
イソカヤ」(天に輝く星に 例を引いてみると ウヤキ星
(牽牛星、織女星)という二星は)

「ナラブレバ 定メヨウリ イカユンデ ドウ シイカリル」
(七夜の夜)並んで合うと定められている 行逢うとの
伝承があるが)

「トウバラマトウ バントウヤ フレハダミ イカイミュナ」
(殿原と妾とは(強制移住後)肌身を触れたことなく行
合ったこともなかった)(喜舎場 1967)

このようにウヤキ星は織女、牽牛を意味しており、宮古島のアンケート調査、現地調査とは全く異なった。地域によって同じ星名でも意味する星が異なるケースは多いものの、確定するには伝承事例がまだまだ少なかった。

●ニブ、ニブブシ…おおぐま座 α β γ δ ϵ ζ η (北斗七星)を柄杓の形に見立ててニブ、ニブブシ。奄美・沖縄で柄杓をニブと呼ぶ。

① 鹿児島県大島郡与論町(和歌山大学、澤田幸輝氏同行で2020年調査)

・話者生年、昭和8年、与論町

北斗七星、ニブ 水をくむニブ。柄杓のニブ。(案内いただいた竹さんが偶然通り過ぎた昭和12年生まれ
の女性に聞くとニブだった。) ニブブシというようにフシ

(ブシ)をつけずに単に「ニブ」と呼んだ。

② 沖縄県島尻郡粟国村

・話者生年、昭和8年、粟国村浜

ニブブシ、ニブは柄杓。クバの葉なくなってきた。
ナナチブシと言った人もいた。

・話者生年、昭和13年、粟国村アギ集落(西)

七つの星、ニブブシ、柄杓(クバの葉、すくうところ、
木などで柄)

③ 沖縄県うるま市浜比嘉島

・話者生年、昭和5年、浮原島(うきばるじま)出身

北斗七星。ニブと聞いた。ニブブシ、ななつ。

●ニブブシ…沖縄県島尻郡渡嘉敷村。南斗六星(いで座 τ σ ϕ λ μ)をニブブシと呼んだ。

明治23年生まれの母親から、実際の星空を見ながら南斗六星をニブブシと聞いた。北斗七星は、ナナチブシ。(北斗七星をニブブシとは言わない)

(話者生年:昭和13年、渡嘉敷村渡嘉敷出身)

5. おわりに

2021年は、コロナ禍により当初計画していた調査の殆どが中止になった。実施できたのは、1月、11月の2回のみである。厳しい状況のなか、星名伝承調査に多大なご協力、ご支援をいただいた久高島の区長さん、そして、伝承を語ってくださった話者のひとりひとりに感謝を申し上げます。

また、鹿児島県の調査については、鹿児島県天文協会の前田利久氏、沖縄の調査については、友利健氏、福里美奈子氏に調査に同行いただき数々のアドバイスをいただくことができた。宮古島、石垣島のウヤキ星については友利健氏にアドバイスいただいた。紙面を借りてお礼を申し上げます。

ところで、2019年南西諸島の調査の再開以降、新たに記録した星名伝承の整理を進めている。その一部を、「南西諸島で新たに記録できた星名」として掲載した。追加修正を行ないながら充実させてきたい。

参考文献

読谷村史編集委員会:1995,読谷村史第四巻資料編3 読谷村の民俗上,読谷村役場

野尻抱影:1973,日本星名辞典,東京堂出版

北尾浩一:2018,日本の星名事典,原書房

島袋盛敏,翁長俊郎:1968,標音評釈 琉歌全集,武蔵野書院,1968

喜舎場永珣:1967,八重山民謡誌,沖縄タイムス出版部

北尾浩一:2021,天文民俗調査報告(2020年),大阪市立科学館研究報告第31号